



吉田松陰の国家論：山縣太華との論争を通して

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2011-09-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 洪, 偉民 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00010115

吉田松陰の国家観

—山縣太華との論争を通して—

洪 偉 民

1. はじめに

吉田松陰に関する先行研究は、膨大な数にのぼる。吉田松陰歴史館の統計によると、吉田松陰に関する著作は、明治後半期に20冊、大正に25冊、昭和は敗戦までに190冊に達している¹。その論調は、たとえば「吉田松陰先生は時代を超えていつまでも皇国臣民の行くべき道を指示する英霊的存在である」²と賞賛されるものが多い。吉田松陰に関する初期の代表的研究としては、野口勝一・富岡政信共編の『吉田松陰伝』³、徳富蘇峰著『吉田松陰』⁴、国木田独歩著『吉田松陰文』⁵の三冊が挙げられる。

中でも名著とされるものは、徳富蘇峰の『吉田松陰』である。この書は明治25年3月、本郷教会堂で行なった公演に基づき、同年5月から9月まで『国民之友』に10回にわたり、連載されたものである。彼は、松陰を「電火の革命家」⁶、「維新革命における、一個の革命的急先鋒なり」⁷と、明治維新を導いた革命家として評価した。国木田独歩の『吉田松陰文』においても、同じく「彼（松陰）はどこまでも革命論者なり、どこまでも革命先生なり」⁸と、革命家として高く評価されている。

しかし、時代の発展と共に、吉田松陰像は日本の政治体制によって利用され、変質を余儀なくされる。戦時中は、臣民教育の手段として国粹主義、国家主義、忠君愛国といった「殉国教育家」、「憂国忠臣」の根源にすえられ、ファシズムのシンボルに祭りあげられた。その際、松陰の尊王論者としての側面が強調され、革命志士としての側面は消し去られてしまった⁹。

1951年に奈良本辰也が『吉田松陰』¹⁰を出版した。これによって「人間松陰像」が確立され、戦後の松陰研究の出発点となった。松陰論は再検討、再評価されることとなり、戦後から現在までに64種の書物が出版された¹¹。しかしながら、それらのほとんどが、神として祭られた「殉国教育家」、「憂国忠臣」という「虚像」の松陰と、「革命の志士」、「革命家」と見られた「実像」の松陰とを対比して論じたものばかりであった¹²。

そして本稿でとりあげようとする松陰の国家観、つまり「国体論」に関する論述には全く触れられないか、或はごくわずかに山縣太華との論争を紹介するくらいである¹³。

松陰の国家観を詳しく論じたものには、松本健一の「国体論という日本の『原理』」¹⁴と野口武彦の「われ聖賢におもねらず」¹⁵がある。しかし、その国家観、つまり国体論については検討の余地は十分にある。例えば、松本は「松陰はそのわが国だけにある『原理』が、『神聖ありて、然る後に蒼生あり』の国体なのだ、と独断している」¹⁶という。確かに「神聖ありて、然る後に蒼生あり」は松陰の言葉である。しかし、松陰のこの言葉を、当時の日本情勢の中において論じないで、たんにその言葉だけを抜き出して理解しようとしても、はなはだ分かりにくい。また、松陰

の「国体論」は、これだけではまだ十分に論じつくせない、と考えられる。また、野口は、松陰の「国体論」には「『《藩体》→国体→人倫→道』という『独同の別』をそなえた価値序列ができあがった¹⁷と、論じている。しかし、松陰の「国家観」はたんにそういった理論の中に終始するのではなく、当時日本の外来侵略の危機のもとで日本はどう対応すればいいのか、という松陰の実践的考え方を示したものである。いわば、君臣が団結一致し、夷狄を追い払うという意味での「万葉一統、君臣一体、忠孝一致」¹⁸である。それこそが松陰の考えた人の為すべき「人倫」と人の踏むべき「道」である、と考えられる。

拙論では、これまで十分に考察されていなかった松陰の国家観、つまり「国体論」について、『講孟余話』および山縣太華との論争を通して、明らかにしたい。

2. 会沢正志斎との出会い

吉田松陰の国家観、つまり国体論は彼の『講孟余話』にまとまったかたちで見える。「国体」とは、簡単に言えば、国の体制・性質である。「国体」という言葉を使い始めたのは、会沢正志斎（1781～1863）である。彼は水戸藩の藤田幽谷（1774～1826）の弟子である。文政7年（1824）、イギリス船が水戸藩へ来航し、その翌年（1825）に幕府が異国船打払令を發布した。それを契機として会沢は『新論』を著した。『新論』は、「国体（上、中、下）」、「形勢」、「虜情」、「守禦」、「長計」の計七章からなる。その中に、会沢は国の不変の本質、つまり忠・孝を組み合わせた先祖祭祀の体系が日本の「国体」である¹⁹と述べる。言い換えれば、先祖祭祀という「孝」の実践礼儀が天皇への永遠の「忠」を導くということである。いわば、「忠孝一致」のことであろう。松陰は幼少のころから父親に『新論』を暗誦させられたため、その時から彼の心は、つねに水戸藩に駆けていた。嘉永4年（1851）の末から翌年の初めにかけて、松陰は東北遊学の途中、水戸藩に立ち寄った。そのおり、彼は会沢正志斎と初めて出会った。その時、会沢は71才で、松陰は22才であった。水戸藩に一月あまり滞在し、その間、彼は会沢を6回も尋ねている。このことについて、松陰は「東北遊日記」に

会沢を訪ふこと数次、率ね酒を設く。水府の風、他邦人に接するや歓待甚だ厚く、歓然として交欣し、心胸を吐露し匿する所なし。たまたま談論の聴くべき者あれば、筆を把りて之を記す。是れ其の天下の事に通じ天下の力を得る所以か²⁰。

と記している。二人が熱心に議論をかわしたことや、松陰が水戸藩の人々の気風に感動したことが伺われる。その時、松陰にはまだ自分なりの「国家観」ができていなかった。帰藩後、彼は日本の歴史を猛勉強した。このことについて、『睡余事録』に、

身皇国に生まれ、皇国の皇国たるを知らずんば、何を以て天地に立たん。故に先づ日本書記三十巻を読み、之れに続くに続日本紀四十巻を以てす²¹。

と見える。

日本という国の「性質」を知らなければ、「何を以て天地に立たん」と考え始めた松陰は、水戸藩への遊学によって、彼自身の「国家観」を形成し始めた。その点からみると、水戸藩での滞在が松陰の「国家観」の形成に大きな影響を与えたのであろう。

3. 松陰「国家観」の形成の時代背景

吉田松陰は1830年に生まれた。父の杉百合之助は長州藩下の家禄わずか二十六石の下級藩士である。5才の時、叔父の吉田大助の養子となり、叔父に「山鹿流」の家学に学び、11才の時、藩主の毛利敬親の前で『武教全書・守城篇』の「籠城の大將心定め」を進講した。藩主はこの若き者の憂国の講義に感激し、松陰門下に入り、山鹿流を兼流することとなった。22才で藩主について江戸へ遊学した。そこで、佐久間象山と出会って、彼について兵学を習い、その翌年、松陰は水戸藩の会沢と出会った。1858年の前半、米国政府は幕府政権に、五つの港を開放することを含む『日米友好通商航海条約』に調印するように求めた。松陰は幕府政権の対応の軟弱さを感じ、『時事論』を幕府に呈し、志ある人の「尊王攘夷」の意を蘇らせ、日本を中興し、清国のような失敗を免れさせようとした。また、幕府閣僚の間部詮勝を刺殺しようと謀って失敗し、自首した。そして1859年10月27日に処刑された。年わずか29才であった²²。

『講孟余話』は松陰が25才の時の著作である。ペリーが来航後、松陰はアメリカ艦船に乗り込み、世界の情勢を自ら確かめようと図ったが、失敗して自首し、野山獄に身を拘束される。いわゆる「下田事件」である。獄中で松陰は囚人たちのために『孟子』の講義を始める。翌年出獄後の終講まで、ほぼ一年である。後にそれを整理して書物として出版された。初名は『講孟箚記』、後に『講孟余話』と改名された²³。

その少し前に書かれたものが「士規七則」である。これは『講孟余話』の内容に重なる部分が多くある。『講孟余話』は『孟子』の講義を通して、「士規七則」に書かれた「万葉一統、君臣一体、忠孝一致」といった内容をより具体化している、と考えてよい。

野山獄に入り、松陰は読書をしながら日本の情勢を考えている。目の前にいるのは渾然たる囚人ばかりである。そこで、彼は「孟子の書を抱き、講究齟磨して以て其の所謂道なるものを求めんと欲する」²⁴ため、囚人たちのためにこの『講孟余話』を講義した。その「道」については、彼は最後の講義の中で「開卷第一義は国体・人倫にあり、故に首として君臣の大義を論ず」²⁵と語っている。この言葉から、松陰は『孟子』を通じて日本に相応しい「道」を探求しようとしていたことが分かる。そして、この言葉から松陰は「君臣の大義」を国体の基本としていたことが伺える。

4. 松陰の国家観

松陰の国家観は、彼の『講孟余話』「尽心下・36章」の論述からうかがえる。松陰は宇宙間の原理には普通と特殊との二種がある、と考えている。この章の論述を通じて、彼は独自の日本国の国体を強調しようとしている。

この章の大意は、次のようである。孔子の弟子の曾子は父親の曾皙が羊棗がすきだったことから、父の死後、羊棗を見るたびに父のことを思い出し、それを食べるに忍びなかった。そのことに関して、孟子の弟子、公孫丑は孟子に問うた。「膾炙と羊棗とはどちらが美味しいのでしょうか」と。孟子は「当然膾炙のほうが美味しい」と答えた。公孫丑はまた問うた。「それなら、どうして曾子が美味しい膾炙だけを食べ、羊棗を食べられない行為を世間は孝行として賞賛するの

でしょうか」と。

孟子は「膾炙は美味しいので誰もが好きだが、羊棗は人によって好きか嫌いかが分かれる。名を忌んで姓を忌まないことは、姓が共通のもので、名は他人と区別するため個人の特有のものだからである」と答えた。孟子はこの章において物事の普遍性（膾炙・姓）と特殊性（羊棗・名）との関係について述べている。松陰はそれによって日本の国体に関して自分なりの国家観を生み出した。この章の解釈の中で、彼は次のように説明している。

羊棗と膾炙、姓と名、一は同じく、一は独りなり。同じきを食して独りを食せず。同じきを忌まずして独りを忌む。（中略）道は天下公共の道にして所謂同なり。国体は一国の体にして所謂独なり。君臣・父子・夫婦・長幼・朋友、五者は天下の同なり。皇朝君臣の義、万国に卓越する如きは、一国の独なり²⁶。

膾炙と羊棗、姓と名、それぞれ前者は「共通」、つまり「同」であり、後者は「独自」である。共通に好かれるもの、つまり膾炙は食べるが、好みの分かれる嗜好品、つまり羊棗は食べない。（中略）道は、天下公共のものであるから、孟子のいわゆる「同」である。国体は、その国に特有のものであるから、孟子のいわゆる「独」である。君臣の義、父子の親、夫婦の別、長幼の序、朋友の信、この五者は天下の人々の「同」であるが、わが国の君臣の義は万国に卓越しており、わが国のみの「独」である、と松陰が述べている。その次に、松陰は更に例を挙げ、他国とは異なる日本という国の特有な「体質」を説明しようとしている。

匈奴の壮者は肥美を食らい、老者はその餘を飲食し、壮健を貴び、老弱を賤しめ、父死すれば其の後母を妻とし、兄弟死すれば皆其の妻を取り、是れを妻とする如きは、亦其の一国の独なり。名を忌みて羊棗を食わざるの義を以て是を押せば、国体の最も重きこと知るべし²⁷。

匈奴において、壮者が肥美のものを食べ、老人は壮者の食べ残しを飲食し、壮健を貴んで、老弱を賤しんでいる。父が死ぬと、子はその後母を妻とし、兄や弟が死ぬと、皆がその妻を取って自分の妻とするような風習は、匈奴の独自の「独」である。父の名を忌んで口にせず、羊棗を食べることに忍びないという道理から推して考えると、国体が最も重いものであることは、明白である、という意味である。

しかし、『講孟余話』の中に出てくる一老先生、つまり山縣太華は、常に松陰と異なる「国家観」を持っていた。これについて、松陰は上文の続きに、次のように述べている。

然るに一老先生の説の如く、道は天地の間一理にして、其の大原は天より出づ、我と人との差なく、わが国と他国との別なしと云ひて、皇国の君臣を漢土の君臣と同一に論ずるは、余が万々服せざる所なり。（中略）彼の道を改めて我が道に従わせ難きは、猶吾の万々彼の道に従うべからざるが如し。然るに強ひて天地間一理と云うとも、事実には於て不通と云うべし。独・同の義をもて是を推究すべし²⁸。

しかし、一老先生（山縣太華）の意見のように、道は天地の間、どこにも通じる道理であって、その根源は天から出るものであり、自分と他人との区別がなく、わが国と他の国との区別がない。わが国の君臣の関係を漢土（清国）の君臣の関係を同一に論ずるものに対しては、私（松陰）は絶対に服することができない。（中略）彼の道を改めてわが国の道に従わせ難いことは、あた

かも、われわれが絶対に彼の道に従えないことと同じである。しかし、それを無理に天地の間には一つの道理があるだけだと主張しても、事実において通らないと言わなければならない。このことは、独と同との理論をもって推究すべきである、というのが上文の大意である。

膾炙は誰もが好むものであり、姓は誰もがもつものであり、「共同」のものである。それに対し、羊裘は個人によって好き嫌いがあり、名は個人個人が個別にもつものであり、いわゆる「独自」なものである。吉田松陰は「膾炙と羊裘」、「姓と名」の話から、彼独特の「同」・「独」の考え方をだし、ついに彼独自の「国体論」を形成した。会沢の「国体論」と比べれば、その内容の説明はかなり分かりやすく、ユニークな発想が多いと思われる。会沢は上・中・下の三巻に分け、理論的な論述をしたが、松陰は卑近な例を挙げ、物事の「異・同」を強調し、そこから自らの「国体論」を生み出そうとしている。

上の文には、松陰が特に強調しているのは「皇国の君臣を漢土の君臣と同一に論ずるは、余が万々服せざる」、つまり日本の君臣関係を中国と同じように論ずるのは納得がいかない、ということである。松陰から見れば、日本の「国体」は即ち前述したような「万葉一統、君臣一体、忠孝一致」のことである。その日本の「国体」こそが中国の国体とは違うところである。

では、日本と中国との「国体」はどのように違うのだろうか。

『講孟余話』第一講では、「孟軻、騷人なり。齊の宣王、梁の恵王に遊事す」の中で、松陰は次のように批判している。

孔・孟生国を離れて他国に事へ給うこと、濟まぬことなり。凡そ君と父とは、其の義、一なり。我が君を愚なり昏なりとして、生国を往りて他に行き、君を求むるは、我が父を頑愚として家を出で、隣家の翁を父とするに齊し。(中略)或る人曰く、孔孟の道大なり。兼ねて天下を善くせんと欲す。何ぞ自国を必ずとせん。且名君・賢主を得、我が道を行う時は、天下共に其の澤を蒙るべければ、我が生国も固より其の外に在らず。曰く、天下を善くせんと欲して我が国を去るは、国を治めんと欲して身を修めざると同じ。修身・齊家・治国・平天下は『大学』の序、決して乱るべきに非ず。(中略)堯・舜は其の位を他人に譲り、湯・武はその主を放伐すれども、聖人に害なしとす。我が邦は上、天朝より下列藩に至る迄、千万世々襲して絶えざること、中々漢土等の比すべきに非ず。故に漢土の臣は縦へば半季渡りの奴婢の如し。其の主の善悪を選びて転移すること固よりその所なり。我が邦の臣は譜第の臣なれば、主人と死生休戚を同じうし、死に至ると雖ども主を棄て去るべき道、絶えてなし。嗚呼、我が父母は何国の人ぞ。我が衣食は何国の物ぞ。書を読み、道を知る、亦た誰が恩ぞ。今少しく主に遇わざるを以て、忽然として是を去る。人心に於て如何ぞや。我れ孔・孟を起して、与に此の義を論ぜんと欲す²⁹。

吉田松陰はここで孔孟の道を批判している。自己の国から離れ去って他国に行って君主に仕えることは、あたかも自分の生家を離れ去って、隣家の翁を自分の父として求めようとすることと同じである。国を治め、天下を平らかにするには、必ず先ず自分の身を修めなければならない。この「大学の序は、決して乱れるべきことではない」と彼は強調している。そのため、彼は「其の親を愛敬せずして他人を愛敬する者を、『孝経』には悖徳悖礼と云う」³⁰と言っている。ここで

は、松陰は日本と中国との「国体」が異なることを明確に述べている。つまり、中国が「堯・舜は其の位を他人に譲り、湯・武はその主を放伐」したのと違って、日本は臣民と君主が「死生休戚を同じうし、死に至ると雖ども主を棄て去るべき道、絶えてなし」という「君臣一体、忠孝一致」の国体である、と訴えている。いわゆる「万葉一統、君臣一体、忠孝一致」という松陰の考えが、それである。中国のようにその主を選んで仕えることは、日本ではありえない。いや、松陰から見れば、それは許せないことである。主人とともに死生休戚し、たとえその身は死すとも主人を捨てて他の主人に仕えることをしないのが、日本の臣民のなすべき道である、と松陰は考えたのである。

吉田松陰がこうした主張をなした背景には、当時の日本が西洋諸国に侵略される危険があったからであろう。

1853年6月3日、米国政府は4艘の艦船を浦賀に来航させ、ペリーによって大統領の親書を幕府に渡させた。12月、プチャーチンが長崎に再来航し、通商問題などについて幕府に協議を申し入れた。そして、もし応じなければ、武力に訴えると迫っていた。長い間鎖国政策をとっていた幕府は米国の砲艦に臨んで、対応するすべがなかった。そのため、返答を1年間猶予することを米国に求めた。翌3月、ペリーは再び艦隊を率いて来訪し、神奈川で幕府に強引に『日米親善条約』を調印させた。この条約によると、日本は伊豆の下田と北海道の函館を米国の専用港として開放し、米国がその領事権を有する。そして、その後、もし日本が他の国に権益を与えた場合、無条件でアメリカにも同等の権益を与えることなどが記されている。

無能な幕府に対し、松陰は国体の大義を明らかにすることを通じて、臣として君主に対する「忠」を自覚し、その死をもって報国すべきことを提唱したのである。

我、何を以てか是を制せん。他なし、前に論ずる所の我が国体の外国と異なる所以の大義を明らかにし、闔国の人は闔国のために死し、闔藩の人は闔藩のために死し、臣は君のために死し、子は父のために死するの志確乎たらば、何ぞ諸蠻を畏れんや³¹。

吉田松陰が強調している主従の関係は、実際は「君臣一体、忠孝一致」の思想を強調したものである。彼から見れば、清国が植民地化した現状は、孔・孟のように「其の主の善・悪を選んで転移」し、自己の生国を離れ去って他国に行き君主に仕える、つまり君主に不忠である結果から起きたことである。清国のようにならないためには、日本の臣は「万葉一統」の君に対して死に至っても変わらない「忠」を体現しなければならない。そうすれば、「何ぞ諸蠻を畏れんや」、つまり外国を懼れることは何もない、と彼は信じていたのである。

5. 山縣太華との論争

ところが、松陰の『講孟余話』は、山縣太華から強く批判された。

山縣太華（1781～1866）、周防国に生まれ、名は禎、字は文祥、通称は半七、太華は号である。はじめは家学の徂徠学を学んだが、その後、江戸の林家に入ってから朱子学に転じた。天保6年（1835）より嘉永3年（1850）まで、萩の藩校、明輪館の学頭を勤めた。いわば、太華は正統派儒学の代表者として欠かせない存在であった。そのため、『講孟余話』を完成した松陰は「浅識

陋学，肯へて自ら信ぜず，必ず有道に就きて正んと欲す。藩儒を回視するに，その耆宿老成，太華縣翁に若くはなし。因って稿を具して教を乞ふ³²という謙虚な態度をもって太華の評語を求めた。そこには彼が太華に対して敬意をもっており，そしてその好意的な批評を期待していたことが伺える。

しかし，太華が書いた「講孟節記評語」の内容は，松陰から見れば，その「大意は幕府を崇んで朝廷を仰ふるに在」³³というものでしかなかった。

結局，松陰は憤激のあまり，誰でも「帝王」になれるなら，「皇国は支那，印度と何を以て別せんや」³⁴といった激しい語を用いて猛然と太華に反論する。二人の論争は，誰も予期せずして，しらすらすのうちに日本の政治思想史の核心である「王道」と「革命」の問題に深く踏み込んで行ったのである。時に安政3年（1856），松陰は27才で，太華は76才の高齢に達していた。

論争は多岐にわたっている。まず，松陰のもっとも自信のあった「国体」に関する議論がとり上げられたが，太華によって否定された。この問題に関しては，松陰は先に述べたように，「道は天下公共の道にして所謂同なり。国体は一国の体にして所謂独なり。（中略）道は天地の間一理にして，その大原は天より出づ，我と人との差なく，我が国と他の国との別なしと云ひて，皇国の君臣を漢土の君臣と同一に論ずるは，余が万々服せざる所なり」³⁵という立場に立っていた。それに対して，当時，新語であった「国体」という言葉について，太華は次のように反論している。

国体と云うこと宋時の書などに往々これ有り，我が邦の書には未だ見当たらず。水府に於て始めて云ひ出せしことか，彼の新論に国体のことをいわんとて我が邦は太陽の出づるところと云ひ，元気の源するところと云う。形体に於て諸洲の首というが如きは，固より迂謬の言にて，前にも述し如く，太陽は地球よりも大にして，外天を一周すること一晝一夜，少しくも休むことなくして世界万国を照らす。何ぞ我が邦より出んや。もし東より出づといはば，我が国東に亜墨利加洲あり，亜墨利加の東に西洋諸国あり，天地圓軀，東西何の常かこれあらん。又気は天地の間に充滿して，大地を包み在らざる処なし，何の原委と云うことかこれ有らん³⁶。

太華はまず水戸藩の会沢正志斎の『新論』における「国体」を批判し，地理の概念から日本が「太陽の出づるところ，元気の源するところ」であることを否定した。太陽が日本より昇ることは，地理に無知で，「尤も兒童の見，笑うべき」³⁷と太華は非難している。この文によると，会沢正志斎の日本の「国体論」より，太華はかなり現実的，かつ科学的な考え方を持っていたことが知られるであろう。

ついで，太華は松陰の上文について，さらにこうのべている。

道は理なり，古の道の字，後世理の字を以てこれを釈して曰く，道理なり。的実深切なりと云うべし。理あれば気あり，気あれば理ありて離れるべからずといえども，理は形なし，気は形あり。今，風を以てこれをいえば，樹を抜き石を飛ばすの力ありと云えども，これを見るに物なし，物なしと言えども，其力有るを以て見ればこれ形あるなり。故に古人陰陽二気を形より下なる物としてこれを器といえり。天地は陰陽五行の気を以て人物を生じ，而し

て後陰陽五行の理これに寓す、其理は即人倫五常の道なり。これは天地の間凡そ人物たる物皆同き所にして、豈唯和漢のみならんや。世界万国皆同きなり³⁸。

松陰のいわゆる日本の独特の「国体論」に対し、太華は万物は陰陽五行の原理により生じ、天地の間にすべての人間は皆同じものを有し、日本と中国が有するのではない、と反論した。そして、さらに彼は次のように述べている。

固より世界万国皆同じことなり、是故に我が国他の国の別なく、人皆学の功に因って此の理を磨き出し、其の善なる者は愈善に、其の不善なる者は之を改め異を変じて共に帰すべきことなり。(中略)余竊かに思うに、当世に皇朝学・国体学などと称し、水府より出でたる一流の学は、独り外国を排斥するのみに非ず、陰かに、皇朝を再興するの意これあることと見えたり。前にも追々言いし如く、日本当今の勢い、鎌倉氏以後、公家・武家と両様に別れ、世にこれより以前を王代と称し、以後を武家と称し、公家は位を司どり給い、武家は土地人民を司り給うことになりて、王臣は王朝に事へ、武家は將軍家に事へ、其の勢定まりたること六百年なり。位を司どり給うは貴くして権なく、土地人民を司り給うは権勢甚だ重し。位は虚名にして、土地人民は実なり、是を以て、皇朝を再興せんとすれば、其の名義を貴ばざるを得ず。皇国と云い、神州と云い、国体と云う、皆名義を揚ぐる所以なり。是れに依りて又、名義を以て將軍を貶降せんとす。乃ち、覇と称し公と云うが如き是れなり³⁹。

いわゆる「国体」というものはただ「外国を排斥するのみ」に違いない。そして、「皇国と云い、神州と云い、国体と云う、皆名義を揚ぐる所以」だ、と太華は批判している。太華のこの評語に、松陰は国家が変難のある時、先生が他国に仕えるとしても、私は断じてそんなことはできない⁴⁰、と反論した。太華が心配していたのは、一方で「国体」・「皇朝」の名義で京都朝廷を呼び、他方で、江戸幕府を遇するに「覇」・「公」を以ってすれば、鎌倉時代以来の武士政権が今までずっと保ってきた権利構造の安定、とりわけそれを支えている価値序列が崩壊する恐れがある、という事態であった。つまり、「国体」という理念は、日本の現存する国家秩序において大きな混乱を持ち込みかねない⁴¹、というのが太華の論理であった。

王・覇の論に関しては、日本の歴代の朱子学者はそれを明確にしようとしなかった。尊王攘夷論を唱えた水戸藩ですら曖昧な尊王敬幕といったあやふやな解釈の中にそれを押し込めてきたのである。しかし、一人の儒学者、太華によってこの問題が露呈された。天下の実権は武家が把握し、朝廷はただ人に官職を与えるだけの形式的な存在であるという現実を見ている太華が、松陰のいわゆる「皇朝君臣の義、万国に卓越す」という命題があまりにも事実を無視した空想的な発言に過ぎないと考えたとしても当然のことであろう。そこで彼は、次のように述べている。

我国君臣の義万国に卓越すと云う者、又何くにか在るや。其後明智光秀が信長を殺せし時、羽柴秀吉に従ふ者多く、秀吉終に天下を得られたり。其後秀吉薨去せられしかば、又、天下の武臣徳川氏に帰す。我国君臣の義万国に卓越すと云う者如何や。又、藤氏の専権、信頼・義朝・清盛・義仲等が不臣、北条氏の跋扈、鎌倉以来武家威福を専らにし、其の外戦の間、臣、君に叛き、君を弑する者比々として絶えざる如きも、亦君臣の義、万国に卓越すと云うべきか。但だ天子の位を奪ひて是に代わる者なきは、我が邦の貴ぶべき所といへども、信

頼・義仲・清盛等が天子を拘幽し、義時・高時が、天子を遠島へ遷し、尊氏兵を率いて関を犯すが如きは、不臣の甚だしき、奪ふ者と異ならず。又、鎌倉氏天下の土地人民を有せしが如きは、奪はずと云うべからず⁴²。

これに対し、松陰は特に最後の「鎌倉氏天下の土地人民を有せしが如き」云々の個所に対して、次のように反論した。

其の罪は則ち同じ。此の如く言を立つ、以て奸賊の胆を寒からしむべし。然れども、信頼・義仲・清盛の悪逆なるも、而も篡奪に到らざるもの国体如何ぞや。且つ信頼・義仲・清盛、踵を旋らさずして滅ぶ。頼朝のみ独り覇業を開けるは、渠奸賊と雖ども亦、少しく天朝を奉戴するの意ありたればなり⁴³。

二人の論争はますます激しくなり、意見のすれ違いは明らかになってくる。太華は日本の歴史の中にあつた信頼・義仲・清盛などの「不臣」の例を挙げ、「君臣の義、万国に卓越す」という松陰の「国体」論が根拠のないことだ、と批判している。また、「天子の位」が篡奪されたことはなくても、「天下の土地人民」は篡奪されたことは事実である、と主張している。そして、松陰は現在の徳川政権の正当性を「日本当今の勢」⁴⁴として肯定しているから、これは事実上、日本にも中国のような易姓革命があつたことを認めたのではないかと、松陰に問い詰めた。

しかし、たとえ事実上そうであつたとしても、松陰はあくまでも日本に易姓革命があつたことを認めたくない。だから、たとえ「不臣」がいたとしても、「天子の位」が篡奪されなかりは、日本の「君臣一体、忠孝一致」の「国体」には何も代わりはない。たとえ奸賊というべき鎌倉將軍の頼朝のような不臣でも、また天朝を奉戴するの意があつた。それこそが、日本の「君臣の義、万国に卓越す」のではないかと、弁解した。さらに次のように反論した。

余が本意は幕府諸侯と共に、天朝より宣下ありたる大將軍なれば、天朝の忠臣と見たるなり。万一不忠のことあらず、諫規の責、諸侯以下皆これを任すべし。太華の意は、大將軍を天朝の逆臣と見たるなり。故に天朝に奉事すれば、幕府へ不忠なり。幕府へ事ふるときは、天朝は路人なりと云うにあり⁴⁵。

松陰から見れば、「不臣」であつても、「天子の位」だけは篡奪されることがない。それこそが日本の「国体」の誇るべきゆえんである。だから、天朝の大將軍になれば、天朝の忠臣と言える。太華がその点を見ないし軽視したため、「大將軍を天朝の逆臣と見」ざるを得なくなるだろう、と松陰は反論した。

ここでは、二人のすれ違いは、「天子の位」を篡奪することさえなければ、日本の「君臣一体」の「国体」は誇るべきである。従つて日本の「君臣の義、万国に卓越す」るのも当然であるとする松陰の主張に対し、太華は「不臣」がある以上、「君臣の義、万国に卓越す」ということは言えない。たとえ直接「天子の位」を篡奪したことはなくても、天子の「土地人民」は篡奪されているから、「天子の位」を「奪はずと云うべからず」と太華は言わざるを得なかつたのである。

この論争により、一つの問題が出てきた。つまり、忠誠の対象は「天朝か、幕府か」という二者択一の問題である。しかし、松陰は当時、まだ倒幕者でなく、諫幕論者であつた。言い換えれば、松陰は当時、二者択一でなく、天朝と幕府との二重の忠誠である、という立場に立っている。

例えば、「梁恵王下篇第3章」について、太華は「問う、今の諸侯は天朝の臣か、抑々將軍の家臣か」⁴⁶という質問について、松陰は「天朝を重んじ、幕府を軽んずることは、浅々の見なり。天朝有りて幕府も有り、故に天朝を貴び皇国の大計を安らかにすることも、即ち幕府も亦た自ら重んずるなり」⁴⁷と論じた。そのため、諸侯は幕府と一緒に天朝を尊い、幕臣や王臣を分けること無く、「朝廷を尊び、幕府を敬い、夷狄を攘し、蒼生を愛する」⁴⁸ということをなすべきである、と彼は述べている。

吉田松陰から見れば、「我が主に忠せざれば、安ぞ能く皇朝を忠するや。皇朝を忠せざれば、安ぞ能く吾が主に忠するや。皇朝と我が主を之れに二に分けることは、習俗なり」⁴⁹ということであるため、家に在って父に事えれば孝となり、臣として君に事えれば忠となる。人はそれぞれ自分の君主に仕え、各自の忠を尽くし、天下を治め、四民を安らかにしなければならぬ。そうしてはじめて皇朝に対する忠を言うことができる。もし、君に仕えて不忠になり、父に仕えて不孝になれば、則ち君臣、父子相い悖き、天下の乱れを起し、皇朝に忠を尽くし、皇朝に奉事することも当然できなくなる、という。それがいわゆる彼の「忠孝一致」の意味であろう。

しかし、二人の論争は思わぬ方向へととなっていく。つまり松陰は当時日本の現状を目にして、清国のような植民地を免れるため、日本の「国体」を明らかにし、君主とともに外敵を追い払うべきだ、と唱えている。いわば、松陰の「国体論」はかなり現実性がある、と考えられる。しかし、松陰は太華との論争を繰り返すうちに、その初心がだんだんうすくなっていく傾向がうかがえる。その一方、太華は事実上、日本の「万葉一体」の「君臣大義」は失っているから、いわゆる「国体」というものは無意味で、たんに外国を排斥すれば今までの価値秩序を乱すだけだ、と主張している。その結果、二人とも「国体」という言葉に拘るあまり、観念的な論争に終始している。

とは言え、松陰は太華との論争をきっかけに、その後、諫幕論者から討幕論者になっていったことは事実である。

6. おわりに

「国体」という言葉は吉田松陰の独創ではない。彼は水戸藩の会沢正志斎の影響を受け、『孟子』の講義をきっかけに、天下共通の「道」とその国の特有の「道」、つまり「同」と「独」との考えから、自身の「万葉一系、君臣一体、忠孝一致」といった「国体論」を形成した。そして、この「国体」に関して、藩儒の山縣太華と激しい論争を交わした。一見どちらにも勝ち負けはないように見えるが、松陰が後に諫幕論者から討幕論者になることから考えると、この論争が彼に大きな影響を与えたとも言えるだろう。

注釈

1. これらの数字は1998年、吉田松陰歴史館による統計された。注11も注1に同じ。
2. 山口県教育会編『吉田松陰全集』第一巻「刊行の辞」、1939年（普及版）、p. 1。
3. 明治24年刊。

4. 岩波クラシックス59, 岩波書店, 1984年。本書は明治26年刊初版本をもとにして, 復刻出版されたもの。
5. 『定本・国木田独歩全集』第八卷所収, 学習研究社, 1977年。本書は明治29年初刊。
6. 注4に同じ, p. 19。注7も注4に同じ, p. 20。
8. 注5に同じ, p. 269。
9. これに関する書物は, 上田庄三郎著『青年教師吉田松陰』, 啓文社, 1938年刊, 福本義亮著『至誠殉国吉田松陰之最期』, 誠文堂新光社, 1940年刊, 品川義介著『人間練成の吉田松陰』, 東水社, 1941年刊, 広瀬豊著『教育の神吉田松陰』, 武蔵野書院, 1941年刊, 同氏著『勤皇の神吉田松陰』, 日本青年教育会出版部, 1943年刊, 武田勘治著『不滅の人吉田松陰』, 道統社, 1941年刊, 池田宣政著『殉国の人吉田松陰』, 偕成社, 1942年刊, 村崎毅著『神国魂吉田松陰』, 学習社, 1942年刊, 山中峰太郎著『黎明日本の炬火吉田松陰』, 潮文閣, 1942年刊, 和田健爾著『吉田松陰殉国の精神』, 京文社, 1942年刊, などのものが挙げられる。
10. 岩波書店, 1951年刊。
12. 以上の論述は, 郭友連の「日本における孟子の受容と吉田松陰の『革命思想』について」を参照, 源了円編『日中文化史叢書・思想』所収。また, 「虚像」と「実像」との話については, 脇英夫の「松陰の虚像と実像」, 『ピエロタ』, 1973年2月, 18号所収, 富成博の『吉田松陰』・「松陰の人間像」(長周新聞社, 1988年3版, pp. 10~61。)にも詳しく分析している。
13. 例えば, 古川薫の『吉田松陰』(創元社, 1995年)には松陰は山縣太華との論争に関して論述したが, その国体論に関しては全く触れなかった。また, 富成博の『吉田松陰』(長周新聞社, 1988年)にも松陰が山縣太華との論争として紹介したものである。それらの書物には松陰における国体論の形成と展開については全く触れなかった。
14. 『開国のかたち』, 毎日新聞社, 1994年, pp. 79~90。
15. 『王道と革命の間』, 筑摩書房, 1986年, pp. 251~314。注17も注15に同じ, p. 283。
16. 注14に同じ, p. 90。
18. 松陰は「士規七則」の中に「国体」について, 「万葉一統, 君臣一体, 忠孝一致」と解釈した。「野山獄文稿」, 山口県教育委員会編『吉田松陰全集』第二卷所収, 1934年, p. 13。
19. 日本思想大系『水戸学』所収『新論』, 岩波書店, 1973年。
20. 山口県教育委員会編『吉田松陰全集』第九卷所収, 1934年, p. 165。
21. 山口県教育委員会編『吉田松陰全集』第二卷所収, 1934年, p. 283。
22. 「吉田松陰年譜」より。注21に同じ。注23も注22に同じ。
24. 『講孟余話』「序文」, 注21に同じ, p. 251。
25. 『講孟余話』「尽心下・38章」, 注21に同じ, p. 487。
26. 「尽心下・36章」, 注21に同じ, pp. 479。又, 本稿の『講孟余話』に関する書き下し文や訳文は近藤啓吾全訳注『講孟箴記』(講談社学術文庫, 1995年)による引用, 或は参照するものである。注27, 28も注26に同じ, p. 479, p. 480。また, 35も注26に同じ, p. 480。
29. 「孟子序説」, 注26に同じ, pp. 263~264。注31も注29に同じ, p. 264。

30. 「梁惠王下・第2章」, 注26に同じ, p. 274。
32. 「太華翁の講孟筭記評語の後に書す」, 山口県教育会編『吉田松陰全集』第三卷(普及版), 岩波書店, 1939年, p. 547。注33, 34, 48, 49も注32に同じ, p. 547, p. 548, p. 570, p. 566。
36. 「講孟筭記評語」下の二, 注32に同じ, pp. 606~607。注37も注36に同じ, p. 607。
38. 「講孟筭記評語」下の二, 注32に同じ, p. 602。
39. 「講孟筭記評語」下の二, 注32に同じ, pp. 609~610。
40. 「講孟筭記評語の反評」, 注32に同じ, p. 550。
41. 野口武彦の論点を引用。注15に同じ, p. 294。
42. 「講孟筭記評語」下の二, 注32に同じ, pp. 605~606。
43. 「講孟筭記評語下の二反評」, 注32に同じ, p. 606。注44も注43に同じ, p. 548。
45. 「講孟筭記評語下の一反評」, 注32に同じ, p. 595。
46. 「講孟筭記評語草稿」, 注32に同じ, p. 559。
47. 「講孟筭記評語草稿の反評」, 注32に同じ, p. 569。

On a view of Nation States in Syoin Yoshida's controversy with T. Yamagata

Weimin HONG

The dispute was caused by Taika Yamagata(山縣太華)'s critics on Syoin Yoshida(吉田松陰)'s “Komonyowa”(講孟余話). This article pointed out that, Syoin Yoshida(吉田松陰)'s viewpoint on national prestige did not simply show that Japan was different from China at that time period. More importantly, it emphasized how Japan could avoid making the same mistakes as China's Qing Dynasty. In this respect, his article was of great realistic significance.

Meanwhile, this article indicated that, the dispute between Syoin Yoshida(吉田松陰) and Taika Yamagata(山縣太華) played a key role in changing Syoin Yoshida(吉田松陰)'s position from supporting the government into anti-government.